有馬竹細工の盛衰（1）

角　山　幸　洋

要　約

有馬竹細工は「有馬筆」とともに、「有馬の湯」の湯治客の土産として駿河竹細工と並んで天下に名声が轟いていた。ところが明治初期にはウイーン万国博覧会を通じて欧州に知られ、起立工商会社など貿易会社、または在神戸の外国商会などにより輸出が促進されることになった。とくに独自な竹材は容易に西日本から得られること、また農家の副業として容易に製作でき原価を引き下げられ、その反面では安価な輸出原価により値下げ競争に走り、また製作技術の容易なことから国内外に技術移転され、明治後期には、強力な推進者を欠いていて次第に衰退するにいたった。

キーワード：竹細工；竹籠；竹籃；竹器；有馬温泉；別府温泉；駿河竹細工；ウイーン万国博覧会；内国勧業博覧会；輸出貿易；米国関税法
経済学文献季報分類番号：04-23

—目　次—

1．はじめに
2．竹細工の特質
3．有馬竹細工の起源
4．明治初期の有馬竹細工（以上、本号）
5．竹細工生産と輸出　　（以下、次号）
6．有馬竹細工の衰退
7．周辺地域への伝播
8．対比地域の竹細工
9．むすび

1．はじめに

有馬は兵庫県有馬郡有馬町（旧称、湯山村）に所在し、古くから「有馬の湯」と知られた町であるが、その一方では古くから竹がおい茂り、それを材料として有馬温泉の土産品をつくり上げ、有馬筆と有馬竹細工とが広く一般に知られていた。この有馬では古くは『日本山海名物図絵』にみえ、「有馬籠摂州有馬、日本第一の温泉にて四時温治の人おほく／繁昌の地なり。此所の人竹細工に妙を得ていろいろの竹籠をつくり出す。有馬籠とて名物なり。湯治の人買求めて家づととす。」とみえているが、これと対抗して「駿河の府中、又竹籠の名

物有。其細工よし。有馬細工にまけずおとらず。関東の人は有馬籠は名もしらず。駿河籠を賞翫する也。」とあり[1)]、江戸時代には有馬と駿河の籠は日本に於ける竹細工の産地として、よく知られていた生産地であった。ただこれ以外の地については明らかではないが、［表］1．全国竹細工分布表からも分かるように、日本の中部構造線（ホッサ・マグマ線）にあたる地域に西日本の生産限界があったとみることができるではないか。それから東の地域では、人為的に遅れて移植したものとみられ、または竹が植生している地域では「竹材」として移出し、あるいは竹細工の発展につれ東へ移植が興ることになった。

このうち有馬については、竹細工・有馬籠・竹器（有馬籠との記述もあるが、本稿では竹細工として用語を統一しておく、ただし統計資料については竹器とあるので、統計引用の場合は、それに従うことにする）は、現在では有馬筆を除いて、一般には忘れ去られつつあるが、かっては江戸時代から明治時代にかけ駿河の竹細工と並び、二大産地としてよく知られた生産地であったが、最近では過去の竹細工の名声が、まったく薄れているのが現状である[2)]。

竹の植生はもと東南アジアにあり、その特定地域に限定された植物であったが、逐次、北方にむかって人為的に移植されてきた。このような熱帯から亜熱帯、温帯と移植されるのは日本・中国でも同様で、中国では毛沢東が「毛竹北移」として北への移植を奨励し、人為的に移植することで拡大がはかられている[3)]。このようなことは漢代に紙の前段階に使用された「竹簡」が中国南部から中部にかけて出土し、また「木簡」だけは中国北部から出土をみることから竹素材の使用が明らかで、在地の素材を使用していることである。

同様なことは日本でもみられ、鹿児島に入った竹が近畿地方に栽培されるようになるのは6世紀前半からで、畿内へ移住（地名＝大住・阿多）させられた畿内隼人により竹細工を貢納生産していたとみることができ、このときには北への移植があった。少なくとも奈良時代には、畿内の地域にまで到達していたようで、竹の移植には畿内隼人の手によって移植が試みられたらしい[4)]。

『府県物産志』巻7にみえる北海道から内地各地へ「諸県諸工江直注文之分」とある製造品のなかに「有馬竹細工、駿河竹細工」がみられるのは、北海道（このときは松前の地域にとどまるのであろう）には産出しない品目で、陶器では薩摩・肥前・尾張・淡路・九谷など

1）『日本山海名物図会』巻之4　宝暦4（1754）年

2）この有馬竹細工の参考図書は探索したにもかかわらず、独立した関係書は下記の一書のみで、過去に出版された一般書は存在しないのではないか。
『有馬籠』有馬町商工会　1999年　（兵庫県）山口町徳風会

3）河南省土産果品公司・河南省農学竹子研究室編『毛竹北移技術図冊』農業出版社　1978年12月

4）角山幸洋「古墳時代の筬の機能」『竹と民具』日本民具学会編　1991年10月　125～134ページ。

の産地を挙げている[5]。この移入品には北海道では産出しないもの、それに各地物産で北海道にまで著名な物品として知られ、当時は松前には無くてはならない必要な物資であった。

『府県物産志』の作成するに際して参考にされた諸国の産物は、幕府において各府県の物産を収集していた『諸国産物大略』であるが、これらの調査書は過去からの言い伝えで実際の産物ではないことは、『府県物産志』との間に品目のずれを生じ、これを各府県へ配布しても現実の物産との間に格差を生じ、各府県は符合しないことを博覧会事務局へ申し出ているのであり、新たに1冊を作成しなければならなくなった。ただ中央政府の統制に反対する府県では存在することがないのは、言うまでもないが、それ以外の府県では、その指示に従って受け入れ報告することにしたらしい。

この『府県物産志』の内容には、単位・数量の取り方に地方性があり、全国的に比較し統計を取ることができない部分がある。しかし全国にわたる日本の生産力を表している明治5年という時点における唯一のものとして貴重な調査であり、統計として最新の報告でもあった。なお養蚕・蚕糸については、輸出貿易の関係から追加調査の依頼をしている[6]。

『府県物産志』には、57種の多様な竹器が静岡の竹細工とともに掲載されている。北前船で松前まで運ばれ国内では主要な竹細工の2つの生産地として知られていた。これらの品目は北海道開拓使から「諸県職工江直注文之分」として纏められ、他の著名な陶器・漆器・銅器など12品目とともに掲げられているが、「静岡竹細工」とともに全国的によく知られていた品目であった。ここには「竹細工・有馬郡湯山町製　1ヶ年製出六百五十櫃　代価一櫃平均金七圓」とあり、詳細な「櫃」の内容が明らかではなく、一行で表現される数量だけであり、その数量の不明瞭さを解消するためにも、［表］2.「ウイーン万国博覧会出品目録」とを比較対照し、「名称・数量・金額など」を代入したのであるが、それ以外の品目についてはこれだけでは明らかではない。なお196～278（内2点は欠番号）までの82点が出品されており多様な出品であった。なおこの名称には、それぞれ金額が書かれており、それをウイーンで販売するための売価まで書き入れがあって、展示後、販売することにしていたので、当時の物価が明らかとなる。ただ輸入関税など、どのように規制されていたかについては調査していない。それぞれの品目が、どのような形態をしていたのかについては『澳国博覧会出品写真帖』でもすべての品目を明らかにはできない。この［図］1の写真帖には、籠のほか樽・桶・蓑笠・篩・檜細工などがみえ、細工物のうち代表的なものも含めての写真であり、竹細工は写真中央上部の「箕」と下部にみえる「米上げ笊」だけであるが、写真には使用地

5）この品目は［表］3. ウイーン万国博覧会への出品物と同様であり、今後、検討する必要があろう。

6）角山幸洋編『府県物産志』（明治7年6月、国立公文書館・内閣文庫蔵）経済・政治研究所研究双書第100冊　平成9年3月　351ページ以下参照。

［表］1．明治5年全国竹細工分布表（『府県物産志』による）

府県名	改名・改称	製造物名	単位	数量	価格（代価）	規格	製出高	備考
東京府	東京都	燭台	1対	3対	5圓	竹細工	—	
		香箱	1ツ	2ツ	50銭	同	—	
		筆立	1本	50本	2圓91銭6厘6毛	同	—	
京都府	京都府	（植物）晒竹	1本	8本	14銭5厘	—	—	
		（植物）胡麻竹	1本	2本	7銭5厘	—	—	
		（植物）寒竹	1本	10本	3銭5厘	—	—	
大阪府	大阪府	丸竹団扇	1本	1本	凡3銭7厘	—	1ケ年7万本	
				1本	凡2銭2厘	—	—	
		丸竹団扇（大）	1本	1	2銭	—	—	
		（中）	1本	1	2銭6厘	—	—	
		（小）	1本	1	3銭	—	—	
		竹千筋懐中カバン	1	2	1圓50銭	—	—	重複されているのか同一のものが記載
		同籠目カバン	1	1	87銭5厘	—	—	
		同網代懐中カバン	1	1	75銭	—	—	
		同網代懐中カバン	1	1	50銭	—	—	
		竹回柄杓	1本	2	5銭	—	—	
		白柄杓（大中小）	1本	3	13銭5厘	—	—	
		煤竹鉢臺（大）	1	1	14銭5厘	—	—	竹器藍緒自在ナル者
		（小）	1	1	12銭5厘	—	—	
		竹細工・鉢臺		2	20銭	—	—	
		（植物）白竹	1本	10本	34銭	径1寸長6尺5寸	—	
		（植物）煤竹	1本	10本	42銭	径1寸長6尺5寸	—	
		（植物）苔竹	1本	10本	10銭	径1寸長6尺5寸	—	
		竹飯櫃		1本	66銭5厘	1升5合	—	
		竹燈籠	1	2本	15銭	4角6角取合	凡1500余	1ケ年製出大小取交凡
		同小白竹	1	3本	17銭5厘	3角4角6角	—	
		同小菱	1	1本	21銭2厘5毛	—	—	
		同大白竹	1	2本	22銭5厘	4角6角取合	—	
		同大菱	1	1本	27銭5厘	—	—	
		鼈甲竹筆立	1	1本	2銭2厘5毛	—	—	
		鼈甲竹墨挟	1	1ツ	1銭	鼈甲竹製	凡5万	1ケ年製出
		白竹墨挟	1	1	2厘5毛	—	—	
		白竹手提茶棚	1	1	50銭	—	凡1000余	1ケ年製出
		同黒竹	1	1	25銭	—	—	
		黒竹書棚	1	1	57銭	—	—	
		黒竹山形手拭掛	1	1ツ	7厘5毛	山形	凡10,000	1ケ年製出
		同松形	1	1	1銭	—	—	
		同梅形	1	1	1銭5厘	—	—	
		同立瓢箪	1	1	1銭6厘	—	—	
		同丸形	1	1	2銭5厘	—	—	
		同横瓢箪	1	1	2銭7厘5毛	—	凡7万余	
		白竹上品茶筌・上	1	1	4銭3厘5毛	—	—	
		中	1	1	2銭5厘	—	大凡5万余	
		煤竹茶筌	1	1本	5銭6厘	—	小凡15万	
		米砂糖見指シ・大	1	2ツ	8厘	—	—	
		小	1	2本	2厘5毛	—	凡1005本	
		黒竹曲杖	1	1本	3銭	—	—	
兵庫県	兵庫県	竹細工	1	1櫃	平均7圓	—	650櫃	1ケ年製出・有馬郡湯山町製
		有馬筆	1	1対	平均1銭	—	150万対	1ケ年製出・有馬郡湯山町製
新潟県	新潟県	竹笊	1	1	136圓余	—	7800	蒲原郡北五百川村・1ヵ年製出
		同	1	1	173圓余	—	2760	蒲原郡中野新田製・1ケ年製出
		同	1	1	17圓余	—	1300	蒲原郡笹岡中新田於山村製・1ケ年製出
宇都宮県	栃木県	竹笠	1	1蓋	1538圓余	—	凡61万7千	河内郡宇都宮製
三重県	三重県	竹火縄	1	1駄		—	30駄	伊勢鈴鹿郡関製
度会県	三重県	竹皮草履	1	1足	25圓	—	3100足	伊勢度会郡妙法寺村製・1ケ年製出
浜松県	静岡県	（植物）大江南竹	1	1	—	—	—	加茂井郡（モウソウチク）
静岡県	静岡県	竹細工各種	1	1	—	—	—	静岡製
		竹笠	1	1蓋	—	—	凡8万1000	1ケ年製出
		笊	1	1枚	—	—	凡800枚	富士郡駿東郡・1ケ年製出
		小竹箸	1	100膳	凡3銭3厘3毛	—	凡15万膳	駿河郡製・1ケ年製出
滋賀県	滋賀県	（植物）雲紋竹	1	1	—	—	—	坂田郡西上阪村順慶寺産
筑摩県	岐阜県	真篶竹籠類	1	1	—	—	凡1万	信濃筑摩郡松本産・1ケ年製出
岩手県	岩手県	篠竹細工	1	1	—	—	—	南部製
飾磨県	兵庫県	（植物）黒竹	1	1	—	—	—	飾東郡姫路産
山口県	山口県	竹細工	1	1	—	—	—	長門豊浦郡豊浦製
名東県	徳島・兵庫県	（植物）人面竹	1	1	—	—	—	阿波名東郡下八万村犬山産（ホテイチク）
		（植物）紫竹	1	5本	30銭	—	—	阿波那賀郡坂州村産
		（植物）斑竹（方言）	1	1	—	—	—	阿波郡勝浦郡一宇村産（虎斑竹）
		（植物）シボ竹（方言）	1	1	—	—	—	淡路津名郡洲本産
		（植物）人面竹	1	1	—	—	—	阿波美馬郡祖谷山中産（ホテイチク）
		（植物）方竹	1	1	—	—	—	阿波名東郡助任村産（シホウチク）
高知県	高知県	（植物）斑竹	1	2本	4銭2厘	—	—	安芸郡岩佐村産
		（植物）方竹	1	2本	8銭3厘	—	—	長岡郡池村産
小倉県	福岡県	竹皮笠	1枚	1	永34文	—	—	上毛郡土屋垣村製

府県名	改名・改称	製造物名	単位	数量	価　格（代価）	規　格	製出高	備　考
大分県	大分県	（植物）虎斑竹	1	1	—	—	—	真入郡竹田村産
		（植物）烟管竹	1	1	—	—	—	真入郡姥ケ嶽産
白川県	熊本県	（植物）東坡竹	1	1	—	—	—	（俗称）八代産所々産
		（植物）鸕鷀斑竹	1	1	—	—	—	上益城郡大矢山産
都城県	宮崎県	（植物）虎斑竹	1	1	—	—	—	須木産
		（植物）コサン竹	1	1	—	—	—	福島産
		（植物）斑竹	1	1	—	—	—	田野産
		（植物）島金竹	1	1	—	—	—	福島産
		（植物）錦竹	1	1	—	—	—	
		（植物）棕櫚竹	1	1	—	—	—	
		籠	1	1	—	—	—	那珂郡飫肥産
		籠火鉢	1	1	—	—	—	那珂郡飫肥産
美々津県	宮崎県	（植物）實竹	1	1	—	—	—	高千穂産
		（植物）大江南竹	1	4本	13圓16銭1厘	—	—	高岡産（モウソウチク）
		（植物）斑竹	1	1	—	—	—	
		（植物）湘妃竹	1	1	—	—	—	
		（植物）虎斑竹	1	1	—	—	—	
		（植物）ススノ篠竹	1	1	—	—	—	
鹿児島県	鹿児島県	（植物）螺竹	1	1	—	—	—	佐志産
		（植物）二叉竹	1本	1本	—	—	—	鹿児島産（フタマタ）
		（植物）唐義竹	1本	2本	50銭	—	—	
		（植物）黒竹	1本	12本	58銭1厘	—	—	鹿児島産
		（植物）大明竹	1	1	—	—	—	鹿児島産
		竹細工類・磨硯匣	1	1	75銭	—	—	鹿児島産
		硯蓋	1	1	75銭	—	—	同
		花生	大1対	1	1円50銭	—	—	同
		烟盤	1	1	37銭5厘	—	—	同
		硯箱	1	1	1円75銭	—	—	同
		文匣	1	1	2円	—	—	同
		花臺	1	1	4円12銭	—	—	同
		提重	1	1	1円75銭	—	—	同
		湯桶	1	1	56銭2厘5毛	—	—	同
		飯鉢	1	1	37銭5厘	—	—	同
		丸盆	1	1	12銭5厘	—	—	同
		竹琴	1面	1面	13銭程	—	—	
		江南竹延皮・表皮	1枚	1枚	13銭位	—	—	
		裏皮	1枚	1枚	26銭位	—	—	

［註］1）『府県物産志』の中から、竹細工類（竹籠・竹籃・竹笊・竹皮など）を抽出している。名称の不明なものは、出来るだけ推定をした。

2）小倉県のうち、「永」は「寛永通宝」

3）改称・合併の部分は、府県の一部であり、府県の改称が、明治以降では数回行われている。なお明治43年までの改称・合併については、どの部分であるかについては、つぎの文献を参照にされたい。
内閣統計局編『府県及北海道境域沿革一覧』第一編府県及北海道境域沿革図表　東京統計協会出版部　明治43年8月［複刻版　象山社　昭和54年2月に拠る］を参照されたい。

［表］2．ウイーン万国博覧会出品目録（第8区）木竹製品

番号	品名	質・裂	数・尺	産地・工名	価　格（元価・雑費・売価）
196	書棚	竹網代	2本	兵庫県摂州有馬・川上孝次	（元）15円50銭1本に付1ツ33フロイン
197	丸机	竹網代	1脚	—	（元）15円　（売）40フロイン
198	壜入提籃	竹・鎧編ミ	1	兵庫県・川上孝次大損シ	（元）6円　（売）20フロイン
199	三重提籃	竹網代・小判形	2	兵庫県・閑居清右エ門	（元）17円　1本8円50銭　（売）76フロイン
200	丸提籃	竹網代蜜柑形・網代間紅絹張	6	兵庫県	（元）25円　1本4円25銭
201	壜入提籃	竹	1	兵庫県	（元）11円50銭　（売）38フロイン
201	壜入提籃	杢組	1	兵庫県	（元）4円25銭
202	花生	竹・六角形	1対	兵庫県	（元）9円
203	壜入提籃	竹・六角形	1	兵庫県	（元）2円75銭　（売）11フロイン
204	文庫	竹	2	兵庫県	（元）12円　1ツ6円ツツ
205	重子文庫	竹・四重組	1・7寸	兵庫県	（元）6円
206	大文庫	竹	1	兵庫県	（元）7円50銭
207	文庫	竹	大小2ツ	兵庫県	（元）8円
208	置物台	竹	1	兵庫県	（元）2円50銭
209	花生	竹・六角形	1	兵庫県	（元）3円50銭
210	花生	竹・六角形	1対	兵庫県	（元）5円
211	花生	竹・角口	1対	兵庫県	（元）5円　（売）15フロイン
212	花生	竹・具足形	2対	兵庫県	（元）1対2円50銭（雑）1対（売）1対、フロイン
213	花生	浪サシ蝉形竹	10本	兵庫県	（元）17貫800文（売）1ツ1フロイン 1ツ1フロイン50
214	花生		4ツ	兵庫県	（元）4円
215	花生		1	兵庫県	（元）1円50銭　（売）4フロイン半
216	燭台	竹	1対	兵庫県	（元）1円50銭（売）6フロイン半
217	コップ台	竹・小判形	2	兵庫県	（元）1円50銭（売）6フロイン 1ツ3フロイン
218	杖立	竹・丸筒形	3ツ入子	兵庫県但石田持帰口	（元）2円37銭5厘（雑）内95銭大79銭2厘中63銭3厘小（売）3ツ　15フロイン大6フロイン中5フロイン小4フロイン
219	杖立	竹・丸筒形	3ツ入子	兵庫県	（元）1円50銭
220	カバン	竹・万筋	3ツ入子	兵庫県・中村長次郎 兵庫県但石田持帰口	（元）13円50銭　1ツニ付1円12銭5厘 （売）1ツ8フロイン　1ツ6フロイン

番号	品名	質・裂	数・尺	産地・工名	価　　格（元価・雑費・売価）
221	カバン	竹・千筋	４・内３ツ売店	兵庫県但石田持帰口	(売) １ツ３フロイン
222･1	カバン	竹・上千筋	2	兵庫県	(元) １円50銭１ツ62銭５厘（売）４フロイン
222･2	小カバン	竹		兵庫県	(売) 50カライツ
223	坏入	竹		兵庫県	(元) １円25銭１ツ62銭５厘（売）６フロイン２ツ損シ２フロイン
224	重箱	竹替蓋付・菱組四重	１組	兵庫県	(元)13円（売）大損シ　17フロイン
224	重箱	四段重	1	―	(売) 10フロイン　又３フロイン台ノ代
225	鉢蓋	竹・籠組	３ツ組	兵庫県	(元) ２円75銭１組１円37銭５厘（売）１組６フロイン１ツ２フロイン
225	鉢蓋	麻ノ葉組	２組５ツ組	―	(売) ４フロイン
226	鉢蓋	竹・大丸形	10枚・売店	兵庫県但石田持帰口	(元) １円50銭（売)10フロイン　１枚１フロイン
227	鉢蓋	竹・中丸形	10枚・売店	兵庫県但石田持帰口	(元) １円25銭（売）６フロイン　１枚40フロイン
228	鉢蓋	竹・小丸形	10枚・売店	兵庫県但石田持帰口	(元) １円（売）４フロイン　１枚１フロイン
229	鉢蓋	竹・大小小判形	10枚・売店	兵庫県但石田持帰口	(元) 37銭５厘（売）３フロイン　１枚１フロイン
230	鉢蓋	竹・中小小判形	３枚・売店	兵庫県但石田持帰口	(元) 31銭３厘（売）１フロイン半　１枚50クラ
231	鉢蓋	竹・小小判形	３枚・売店	兵庫県但石田持帰口	(元) 25銭（売）１フロイン　１枚35クライツ
232	茶盆	竹・唐縁	３ツ入子１組３枚	兵庫県但石田持帰口	(元) １円12銭５厘（売）５フロイン
233	茶盆	竹・小判形	３ツ子入１組３ツ	兵庫県但石田持帰口	(元) 33銭（売）３フロイン
234	茶盆	竹・白竹唐縁	子入１組	兵庫県但石田持帰口	(元) 43銭75厘（売）２フロイン
235	茶盆	竹・六角形		兵庫県但石田持帰口	(元) 50銭（売）３フロイン
236	菓子盆	竹・角形	３ツ子入１組	兵庫県	(元) 62銭（売）２フロイン半　３フロイン１組１フロイン25
237	切手盆	竹	４枚	兵庫県	(元) 48銭（売）３フロイン　１枚80クラ
238	広蓋	竹	10枚	兵庫県	(元) 85銭（売）６フロイン　１枚60フロイン
239	広蓋	竹	２ツ入子１組３ツ	兵庫県	(元) 37銭（売）３フロイン　１枚１フロイン
240	広蓋	竹	入子２組	兵庫県	(元) ７円50銭１組３円75銭（売）30フロイン１組18フロイン
241	広蓋	竹	２ツ入子８組	兵庫県	(元) ２円30銭１組29銭（売）16フロイン１組２フロイン
242	盆	竹・丸形	４枚	兵庫県	(元) ４円（売）16フロイン　１枚４フロイン
243	菓子盆	竹・六角形	３ツ入子２組	兵庫県	(元) ３円75銭１組１円87銭５厘（売）６フロイン１組８
244	茶籠	竹	2	兵庫県	(元) ３円（売）14フロイン１ツ７フロイン
245	提籃	竹・モジ組割手	6	兵庫県	(元) 14円１ツ２円33銭３厘 (売) 60フロイン１ツ12フロイン１ツ10フロイン１ツ損ジ６フロイン
246	提籃	竹・８ツ割組	2	兵庫県	(元) ２円50銭１ツ１円25銭（売）12フロイン６フロイン
247	提籃	竹	4	兵庫県但石田持帰口	(元) ３円75銭１ツ95銭７厘（売）16フロイン１ツ４フロイン
248	提籃	竹・花組	３ツ入子１組	兵庫県	(元) １円23銭（売）６フロイン
249	茶籠	竹・文形	1	兵庫県	(元) 93銭８厘（売）４フロイン
250	茶籠	竹・腰タテ形	12	兵庫県	(元) ３円
251	提籠	竹・春慶塗	6	兵庫県但石田持帰口	(元) ２円67銭５厘１ツ44銭６厘（売）18フロイン１ツ３フロイン
252	手付３重籠	竹・菱形	２組	兵庫県	(元) １円１組50銭（売）６フロイン１組３フロイン
253	手付３重籠	竹・東マ形	31	兵庫県	(元) ５円36銭１ツ17銭３厘
254	肴籠	竹・鎧綴シ	３ツ入子１組・２ツ売店」	兵庫県但石田持帰口	(元) １円62銭５厘（売）小１ツ２フロイン半売店中１ツ３フロイン半売店　大１ツ４フロイン半　列品
255	鮎籠	竹	入子45組	兵庫県	(元) ６円62銭５厘　１組14銭７厘３
256	肴籠	竹・小判形	35	兵庫県但石田持帰口	(元) ２円10銭１ツ６銭ツツ
257	テボチン籠	竹	入子40組	兵庫県	(元) ６円75銭１組55銭（売）２フロイン
258	手提籠	竹・唐レンジ透シ	10組	兵庫県	(元) ５円50銭１組55銭（売）３フロイン２フロイン
259	松魚籠	竹	42	兵庫県	(元) ５円47銭１ツ13銭３厘（サケ）
260	乱籠	竹	15組・大中小	兵庫県	(元) ２円16銭１ツ14銭４厘 (売) 大２フロイン中１フロイン70小１フロイン50
261	瓜籠	竹	30	兵庫県	(元) ４円47銭１ツ14銭９厘（売）２フロイン
262	雛目籠	竹	112	兵庫県	(元) ６円92銭６厘１ツ６銭１厘９毛（売)60カラツ
263	雛松魚籠	竹	10	兵庫県但石田持帰口	(元) 50カラ
264	菓子鉢	竹	54	―	(元) ７円42銭（売）１ツ50クラ
265	菓子入	竹・割菊	50	―	(元) ７円50銭１ツ15銭（売）２フロイン
[欠]					
[欠]					
268	菓子入	竹・梅形	1	兵庫県	(元) 37銭５厘（売）２フロイン半
269	菓子入	竹・菊	２ツ入子12組	兵庫県	(元) ８円93銭８厘　１組75銭２厘３毛
270	菓子入	竹・蓋付	７・６角	兵庫県	(元) ３円12銭５厘　１組44銭６厘（売）２フロイン半
271	菓子入	竹・食籠形	3	兵庫県	(元) １円37銭５厘　１ツ45銭８厘５毛
272	菓子入	竹・８ツ割組角形	3	兵庫県	(元) ２円25銭　１ツ75銭
273	菓子入	竹・袂入	33	兵庫県但石田持帰口	(元) １円58銭４厘
274	烟草入	竹・鎧綴シ	３ツ入子３組	兵庫県但石田持帰口	(元) 内２組代50銭　１組代18銭75厘（売）１組２フロイン
275	団扇	竹網代	６本・内５本売店	兵庫県但石田持帰口	(元) １円87銭５厘　１本62銭５厘
276	提ケ炭取	竹・６角形	２ツ入子３組･売店	兵庫県	(元) ３円50銭　１組１円16銭67厘
277	提ケ炭取	竹・花組角形	３ツ入子１組	兵庫県	(元) １円25銭（売）２フロイン
278	網代見本	竹	列11枚・方２尺	兵庫県	(元) 11円33銭７厘（売）５フロイン

［註］１）価格の売価単位「カライツ」「カラ」「クラ」は原稿のまま。
　　２）同様な売価単位「フロリン」は「フロイン」に訂正。

［表］ 3．『有馬竹細工』の生産内容（『府県物産志』巻７による）

品　　名	品名（『出品目録』）	単　位	表　示　価　格	元　　価（『出品目録』）
書棚	書棚	２本	７圓75銭	15圓50銭　１本７圓75銭
鎧形瓶入大形	壜入提籃・鎧編ミ	１ツ	６圓	６圓
テーブル	丸机	１脚	15圓	15圓
小判三重提籃	三重提籃・竹網代	１ツ	８圓50銭	８圓50銭
両面蜜柑形提籃	丸提籃・蜜柑形	１ツ	３圓12銭５厘	４圓25銭
木工組瓶入	壜入提籃	１ツ	11圓50銭	11圓50銭
六角花生	壜入提籃	１ツ	４圓50銭	４圓25銭
六角瓶入	壜入提籃	１ツ	２圓75銭	４圓25銭
文庫	文庫	１ツ	６圓	12圓　１ツ６圓ツツ
万筋カバン	カバン竹・万筋	１ツ	１圓12銭５厘	１圓12銭５厘
七寸四重	四重組・七寸	１ツ	４圓50銭	６圓
大文庫	大文庫	１ツ	４圓50銭	７圓50銭
綟子組提籃	提籃・竹・モジ組割手	１ツ	２圓33銭３厘	２圓33銭３厘
菱組四重蓋附	重箱・竹替蓋付・菱組	１組	13圓	13圓
杖立三ツ入子	丸筒形・三ツ入子	１組	１圓50銭	１圓50銭
広蓋三ツ入子	広蓋・三ツ入子	１組	２圓81銭	３圓75銭
六角菓子盆	六角形	１組	２圓81銭	３圓75銭　１圓87銭５厘
茶籠	茶籠花	１ツ	２圓	３圓
花生		１ツ	２圓	（７点あるが、該当する品目が不明）
六角花生	生・六角形	１ツ	１圓50銭	５圓
蝉形花生	花生・蝉形	１ツ	１圓50銭	４圓
花臺		１ツ	１圓	（該当する項目がない）
燭臺	燭臺	１ツ	１圓	１圓50銭
具足形花生	花生・具足形	１ツ	１圓25銭	１圓25銭
八割提籃	八ツ割組	１ツ	１圓25銭	２圓50銭　１ツ１円25銭
圓盆		１ツ	90銭	（８点あるも、特定できず）
八割角菓子入	八ツ割組角形	１ツ	90銭	２圓25銭　１ツ75銭
小判形コップ臺	コップ台・小判形	１ツ	72銭５厘	１圓50銭　１ツ75銭
文庫	菓子入・食籠形	大小１組	８圓	８圓
食籠形菓子入	食籠形	１ツ	45銭８厘	１圓37銭５厘　１ツ45銭８厘５毛
坏入	坏入	１ツ	44銭	１圓25銭　１ツ62銭５厘
カバン		１ツ	44銭	（４点あるも、特定できず）
蓋附菓子入	菓子入・６角	７ツ	３圓12銭５厘	３圓12銭５厘　１組44銭５厘
提籠	提籃	１ツ	94銭	３圓75銭　１ツ95銭７厘
六角炭取	６角形	１組	１圓17銭	３圓50銭　１組１圓16銭67厘
置物臺	置物臺	１ツ	２圓50銭	２圓50銭
花生二ツ総目鉢蓋	籠組・３ツ組２組	２組	２圓75銭	２圓75銭　１組１圓37銭５厘
菊菓子入	菓子入・菊	12組	８圓93銭７厘５毛	８圓93銭８厘１組75銭２厘３毛
花組提籠	花組・３ツ入子	１組	１圓６銭２厘５毛	１圓23銭
花組角炭取	花組角形	１組	１圓６銭２厘５毛	１圓25銭
文組提籠	文形	１ツ	93銭７厘５毛	93銭８厘
菱組三重二組梅組菓子入	梅形	１ツ	１圓37銭５厘	１圓37銭５厘
竹細工器械	一	18種	２圓５銭	（該当なし、他の分類へ編入したか）
二尺角組形	網代見本・方２尺	11枚	10圓31銭４厘９毛	11圓33銭７厘
広蓋	広蓋・２ツ入子	８組	１圓62銭	２圓30銭１組29銭
腰立茶籠	茶籠・腰タテ形	12本	２圓50銭程	３圓
ナミサシ花生	花生・浪サシ	10本	１圓50銭	17貫800文
肴籠二ツ入子	入子	45組	５圓33銭程	６圓62銭５厘
割菊菓子入	割菊	50ニテ	６圓20銭	７圓50銭　１ツ15銭
乱籠	瓜籠	15ニテ	１圓70銭程	２圓16銭　１ツ14銭４厘
瓜籠	瓜籠	30ニテ	３圓62銭	４圓47銭　１ツ14銭９厘
カツヲ籠	松魚籠	42ニテ	４圓48銭	５圓47銭　１ツ13銭３厘
デボチン籠	デボチン籠・入子	40組	５圓50銭	６圓75銭　１組55銭
東形三重	手付三重籠・東マ形	31組	４圓35銭	５圓50銭
唐レン地二ツ入子	手提籠・唐レンジ透シ	10組	４圓50銭程	５圓50銭　１組55銭
雛籠	雛目籃	112ニテ	５圓55銭程	６圓92銭６厘　１ツ６銭１厘９毛
菓子鉢	菓子鉢	54ニテ	６圓程	７圓42銭

［註］１）「デボチニ」は「デボチン」の誤植
２）この表の作表目的はウイーン万国博への『出品目録』と『府県物産志』とを比較対照することにある。
３）括弧内は比較した項目で数値が一致をみない理由を説明している。
４）５行目毎に区切線を入れてあるのは見やすくするためであり他意ではない。

を明らかにしないが「駿河竹細工」との混同は避けがたく有馬竹細工だけを抽出できないのである。

写真だけでは特徴を捉えることは判断に誤りを生じることになるが、観察をした限りは、重ね合わされ入子になった大小2点の「箕」は、素朴な形で口を切り取った箕であった。また「米上げ笊」は、全体の形は整ってはいるが、地は滑らかではなく段がついていて切りかえしがみえ底が深いようにみえる。周辺部の縁は「巻縁」で絡める竹も間隔がまだらで、箕では地の色とは違っていることから「藤蔓」を使っているのではないかとみられ、巻く間隔は広く粗雑である。米上げ笊では竹で縁を巻いているが、太細の「むら」があり、細工は粗雑で販売を目的で製作したのではないものと判断される。あるいは当時の技術はこの段階に留まるのではないか[7]。

ウイーン万国博覧会から6年まえの慶応3（1867）年のパリ万国博覧会には、鹿児島藩から「竹細工物」が出品されている。ただこのときは鹿児島藩・佐賀藩と幕府だけが参加しているのみで、他の藩は幕末のことでもあり、海外事情が明らかではないので参加はしていない。このとき幕府と鹿児島藩は対立状態にあったので出品物の相談などはなかったが、鹿児島藩の地場産業として自己の支配下にある琉球を含め代表的な工芸品を出品している。あるいはこれ以外に日用品に属する竹籠類を生産していたのであり、それらの用具を基礎に工芸品が生まれていたのではないか。『出品目録』には品目に、

一　竹細工物　花入籠・団扇・扇子・簾

一　竹細工物　風炉・香炉・花入・灯台・置物

を挙げているが、2項目に分けているのは何か別の出品者を表しているらしく、後者のほうが細工に高度の技術を要しているので、大型の竹細工であるために別項目として掲載したのかも知れないし、鹿児島県内での竹細工ではなかろうか。これらの品目を欧州に持参したとき欧州人にとっては東洋にしかない竹の加工品であり、珍奇な加工品として受け取られたのであろう。これらの事情を受け継いで、ウイーン万国博覧会には「有馬竹細工」として出品され販売もされたのであるが、すべては好評であった。その結果、竹細工の輸出先はアメリカが多いのが普通であるが、このような輸出刺激にあっては、欧州他に需要があったと見られるが、もちろん現地のタラオ商会、起立工商会社の輸出協力があったのは言うまでもない。

このことは日本から輸出が求められる動機ともなるわけで、これらの出品物が欧州の人たちを驚かすことにもなった。このたびはパリではなく、ウイーン（オーストリアの人たち）であった。そこには単に生活品としてだけではなく、どうしてもこれを欧州に輸入し利益を

7）竹細工には、「籠・籃・簽・篩」などがあり、それぞれ名称と現物には区分がみられる。

獲得したいとの願いが輸出貿易にまで考えが及ぶことになる。

有馬竹細工は後のことではあるが竹器工業は全国第一位を占めており、さらに「是レ竹ハ東洋ニ於ケル特産トシテ外人ノ好奇心ニ投セルノミナラス本邦固有ノ精巧ナル手工ニ成レルモノニシテ」との評判から独自の技術であるとの風評を信じていた[8)]。

ここに掲載する［図］１ウイーン万国博覧会出品写真帖は、当時多くの博覧会に参加した田中芳男が所有していた写真帖で、おそらく現地で各国へ贈呈されたもののうちの１つであろうが、そこに写されたものは、ウイーン万国博覧会に出品するための「有馬竹細工と駿河竹細工」などが写真に収められているのである。ただ細かく写真に分類されていないので、それを区別できないのは残念なことではあるが、この他に桶・樽などが写真に含まれている。ウイーン万国博覧会への出品ではあるが、それ以上の目的のために撮影されたものであり、当時の内容を推し量ることはできない。

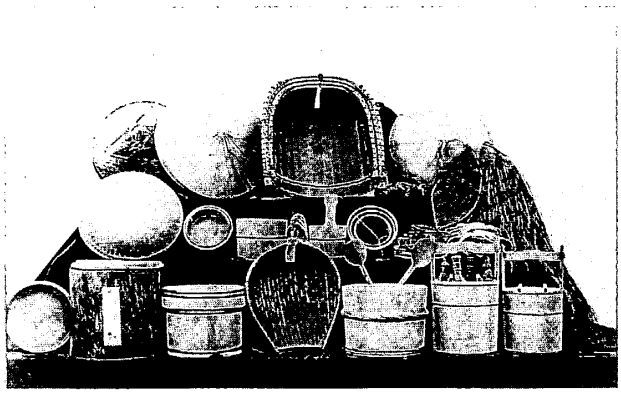

図１．明治の竹細工（『明治六年澳国博覧会出品写真帖』による）

この他、竹材も京都から出されている。参同準備に際して京都府と博覧会事務局との間に、多くの往復文書が見られるが、その「澳国博覧会出品表」に、

「竹　　長三尺物十八本　　代金弐拾五銭五厘

　　内

白磨竹　　六本

胡磨竹　　二本

寒　竹　　十本　　」[9)]

が明治５（1872）年11月の段階での会計処理の明細にみられ、原材料・加工品の中に素材竹が書き上げられている。これからみると竹材のうち珍しい竹を求めているが、これらの竹を

8）『各府県輸出重要品調査報告　附産業概況』農商務省商工局　明治41年12月［『明治後期産業発達史資料』第184巻　龍溪書舎　1994年３月に収む］

9）『京都府史』別部　博覧会類　第２　外国博覧会事件

「澳国博覧会出品表」

角山幸洋編著『ウイーン万国博の研究』関西大学出版部　平成11年３月　402ページ。

持参し竹細工を製作するための参考見本として出品したようである。

［表］1では、ウイーン万国博覧会への「出品目録」を『府県物産志』から抽出して掲載したが、ここには全国の竹器（竹籠・竹籃・竹笊）が網羅されている。そこには集計の目的が目録であり、全国を一率に統計的に網羅することは、前段階で統計も存在しないとき、全国から収集された段階で現物を前にし、これをどのように纏めるかであった。

これらを全国的統一的な目録に集成するのは江戸時代からの博物学者であり、博覧会などの前段階でおこなわれた「物産会」などで経験を積んでいた家柄の学者が登用された。とくに『府県物産志』を作成した京都の古くからの博物学者である山本亡羊の一家である、山本秀夫・章夫兄弟の明治政府での献身的な仕事であった。

その結果、旧幕府から各府県へ配布された資料にもとづいて、全国的視野にたち事物を観察できる過去の経験と見識によって通用する名称、内容の表示、全国に通用する単位が要求されたのであった。

そのような資料から有馬竹細工が、どのような品目・種類・価格であり、どのような生産であったかを詳細に収録している。それらは資料を全国調査の結果、集められた物品により、集計された資料によるものと、経験により適合できた資料によるものであり、この当時の生産物としては豊富な内容を備えている[10)]。

なお有馬竹細工は明治後期には各地へ伝播されるが、そのために形態・価格は、有馬竹細工がそのまま伝えられたものとみられる。したがって有馬竹細工の幻影を求めるには、有馬竹細工と各地の竹細工とを比較検討することが当然のこと望まれるが、そのまえにこのような伝播の事情を知っておくことが必要ではないか。現実には、この時期の現物が残されているかが調査の拠り所で、そこに技術移転を求める現物資料が存在するであろう。

本稿では有馬竹細工が、どのようにして有馬で盛行するにいたったか、なぜ衰退するにいたったかを取り上げ、近代における農業生産物から工業生産物への転換について、なにが促進することになったかを資料に基いて解明することが目的である。

ただこれも時代的に変遷がみられるのであるが、現地における竹の産地のため、僅かに竹柄杓を製作していたのであるが、次第に農家の副業として各種の竹細工を生産するようになり、とくに竹籠がよく知られていた。湯治客により言い伝えられ有馬温泉の土産品から発展することになり、明治初期の地元では農家の副業から、集団的に労働者を一箇所に集め、工

10）田中芳男『明治6年澳国博覧会出品写真帖』（東京大学総合図書館蔵）　明治6年
磯野直秀「田中芳男の貼り交ぜ帖と雑録集」『慶応義塾大学日吉紀要』自然科学第18号　1995年　27～42ページ。
ここでは田中芳男の記録が長年の記録を冊子として保存してきたものを東京大学へ寄贈されたので、その所蔵の写真帖を掲載しているが、ほかに澳国博覧会事務局であった東京国立博物館蔵のものがある。

房として新たに新規の工芸品を生み出すことであった。とくに明治８（1875）年から輸出産業として需要があり、欧州での博覧会効果が発揮され、またウイーンのタラオ商会、わが国では起立工商会社の活動により、竹細工の需要が伸びることになる。その需要を有馬だけでは賄うことができず、周辺の農家に副業に生産を任せることにより、需要を充足することになった。

これらは外国商社からの需要情報は、外国の消費者からの情報の多くを欠いており、すべての需要情報が生産者に反映することはなく、そのため政府は在地の日本領事に報告の提出を求め『通商彙纂』、また国内では『外国貿易概覧』を刊行することにより、一方的に生産者に伝えられた[11)]。

常に間接的に神戸に居留する外国商社（竹細工を扱う商館はこれ以外に見当らない）により、生産量・価格・値引・買い叩きなどがおこなわれ、生産者は、その意向に追従しなければならなかった。需要に応じるためには仲介をする日本商社に依存せざるを得なくなり神戸にある今井商店他がこれを担当している。単なる農家の副業に依存するだけではなく、ある程度に資本を投入する可能性が要求され、自給関係では神戸の外国商館に左右されることになった。ここには居留地貿易であるため、その意向に左右されることが強く品質・価格・数量など、生産者では独自の判断ではできない受注生産が生産に影響を与えた[12)]。

２．竹細工の特質

竹細工は、竹材を６尺程度の長さに切り、保管して置いたものを必要な幅に、細かく割いたのち、順次、編んでいくことになる。一般には日用品としての籠類を製作することが主体であったが、次第に高度な籐で作られた輸入品を参考として高度な室内装飾品、あるいは家具類を製作するようになる。ただ竹細工の当時における特徴は竹籠・竹藍・竹笊のような国内用だけではなく、一般的に有馬では、輸出向としてつぎのような特質をもっていた。

１）竹は一箇所に集合して生育するので、その土地では竹を利用する技術が起こるか、他の地域から移入して、特定の品目について自家生産することになる。そののち余剰物資がで

11）『通商彙編』『官報』『通商彙纂』へと明治期には名称が変更され報告されている。詳細については下記の報告を参照されたい。それらの報告は『各年度輸出貿易概覧』他へ必要な部分は引用される。
角山栄編著『領事報告の研究』同文館　昭和61年12月20日

12）竹細工の神戸外国商館は、明治33年では、以下の通りとみえている（順序は、報告書の通り）。
40　ウオールシユ、113バンタイン、33　ウインコースキ、60　タスカ、20　グンツピー、
51　ストラウス、73　ギンエビソン、36　デヤス
『兵庫県物産調査書』兵庫県内務部第４課　明治33年７月［『明治後期産業発達史資料』第50巻　龍溪書舎　1990年10月に収む］

きるか、特定の生産技術を個人的に生み出すと、その技術を教習することになり、その地域の特定の製作品として成立することになる。ただその製作品を消費を促進する素地がないと、いくら生産しても意味がないことである。この媒体をなすのは「有馬温泉の土産」であり、このことが生産拡大のきっかけとなったのであろう。なお江戸時代には、竹柄杓を製作していたという記録しかないが、日用品からの出発は、発展を伺うことができる。

2）竹原料は、まず「菊割り」で等分に割り（割竹）、さらに竹皮（皮物）・竹身（身物）に分け、用途に応じて染色することもある。あるいは竹材料のまま、国内移出すること、あるいは海外輸出することもある。また有馬竹細工とは関係しないが、竹皮は生ものの包装に使われているのは承知しているが、竹原料と同様に有馬では徳島から移入されている。

原料は在地のものを使用することもあるが、乱伐により在地のものが不足するならば、国内竹（多くは大分県、通称豊後竹）を移入（海上運送）し加工生産していた。これは江戸時代からの継続事業であるが、輸出の増加に伴い国内移入も順次、増加することになるが、有馬竹細工の衰退にともない、原料竹の輸送は減少することになる。

3）最初は固定した在地の名称で、有馬という名称をつかっていたが、次第に農家の副業として生産拡大したのちは、有馬の名称を付けるのが販売に有利であることから、あるいはその名称をつけなければ販売に際し不利になることから、そのために原産地を偽ることになる。このような生産事情は現在でも広く一般に行われ、海外にまで及ぶことがある。

4）生産技術として竹細工は加工度が低いものであれば、農家の副業として容易に習得できる技術で普及をみるが、その事業は内陸部にある限り、仲介業者の手を経なければならず、神戸まで運送賃を要することになり、運送手段（荷車・大八車）が解消するならば、内陸部への進出する可能性を含んでいた。

5）竹は加工がしやすいが、直ぐ害虫が付きやすく、製品の永続性に欠けるのが欠点であった。日本の竹の性質は脆弱で往々破損しやすいのが欠点で、明治後期には、外国（特にアメリカ）では、丈夫な原料竹をつかった中国産に切り換える傾向がみられた。

6）輸出などに際してはもちろん船積輸送されるが、国内輸送にあっても破損しやすい脆弱品であった。輸出港は神戸（尼崎港から神戸港）と横浜（清水港から横浜港）であるが、圧倒的に、神戸港に依存していた。内陸部の製品は陸上運送により外商に売り渡した。

7）竹細工の輸出は単なる国内日用品から仕向地の要求に答えて高級品にまで輸出され、室内工芸品として家具まで製作され発展し、机・椅子・炉塀など、逐次、毎年新規なものを製出して需要を喚起することに製作されあったが、外商の意向を製造業者に指示しても、他の業者がすぐに模倣するようになり、安価に販売することで、もとの意匠は、不利な競争に遭遇せざるを得なくなり、価格競争が激化させることになる。このように業者間の価格競争

が、現地での取引関係を悪化させることになった。

8）竹の植生は東南アジアにあり、この時期には欧州では生育しない。この事情が欧州に輸出される基礎条件となった。アメリカでは生育するが、幹は柔らかく加工しにくい。そのため原料竹を東洋から輸入し、現地生産することで原料竹の輸出が増加することになる。

このような原料の竹が本来もつ特長が、あるいは生産が増大するが、次第に竹のもつ特徴が崩れ、木竹、あるいは籐などの永続性のある製品が、台頭する結果となり、安価な竹製品は、木・籐との組み合わせにより、高級化に向かうことになった。その結果、輸出向から内地向へと傾向が強くなっていった。大正時代に入ると急速な変化がみられ、国内向に転向する傾向があった[13)]。

3．有馬竹細工の起源

有馬竹細工は豊臣秀吉と関係つけることが行われ、湯治に秀吉が入浴したという古事にならい、また秀吉が茶会を催したことから利休の好みに竹柄杓があっているとする。温泉・秀吉・大茶会・利休と有名人にこと寄せて、起源を語ることには無理がみられる。

有馬に竹細工が製作され一般に知られるようになったのは、文献による限り江戸初期にまで遡ることができる。『有馬地志』には、

「土産門　巻筆・色紙・染楊枝・木器・竹器・竹籃・鉄器・磨砂・松蕈・黒皮蕈・鶏隼・麋鹿・鮮魚

竹器　湯山多巨竹割之以剥其竹薄片皮而揉之作柄杓（倭俗揉竹工或木以造小圓器而以薄板為底貫竹或木於圓器之半腹以是為柄或斟湯又汲水是謂之柄杓）又以牛膠貼竹片皮於木筥之外而以為竹器一切筐筥無不製之

竹籃　居人以竹細割之作籃籠簽篩之類其細密非他邦之所及也　」

とあるが、文献に現れるのは江戸初期のことで、土産門には「巨竹多」く生育しているので、これを以って竹器・竹籃、巻筆がつくられた。解説には「竹の薄片皮を剥ぎ、これを揉んで」柄杓とし、「ニカワで竹片皮を木筥の外面に貼り」竹包器としているが、一切の筐筥は製造しないとしている。また「竹を細く割き、籃・籠・簽・篩の類を作るが、その細密なることは、他邦の及ぶところにあらず」と竹籃を説明している。また「竹を細く割き、籃・籠・簽・篩の類を作るが、その細密なることは他邦の及ぶところにあらず」と竹籃の技法を

13）農商務省農務局編『副業参考資料　竹製品ニ関スル調査』農商務省農務局　大正11年
発行の理由は大正年間に入ると、農家の副業が不振となり、それまでの竹細工の発展を副業として調査する必要にせまられた。したがって数値は調査時の現状を反映したものではなく、それまでの集成である。

説明している[14)]。

この有馬竹の生産事情については『有馬郡誌』に過去の業績を伝える文献があるだけで、これだけでは有馬竹細工の状態を十分に説明しているとはいえない[15)]。

さらに『有馬温泉史話』では、それまでの資料を集成し和歌を付け加えている。

「四五　有馬土産

竹器　湯山多巨竹工割之以剥其竹内薄片皮而揉之柄杓「倭俗揉竹或木以造小円器而以薄板為底貫竹或木於円器之半腹以是為柄或斟湯又汲水是謂之柄杓」、又以牛膠貼竹片皮於木筥之外面以為竹器一切筐筥無不製之

竹籃　居人以竹細割之作籃籠簽之類其細密非邦之所及也（有馬地志）

竹器　此所はわきてふとくすくなる竹多し、其竹の薄皮をさき続飯をもて箱の外につけ色々のかたちに作りなすものあまたなり、其外銚子ひさくさまさまのうつは物所せく作置ぬるを求る人もかすかすなりけり、

大竹の世に隠なき細工ゆへ　たれも横手をうつはものかな　　政　長

夜をこめていそく買手の声きけば　嬉しく竹を枉物師哉　　貞　因

有馬籠細工　　摂州有馬日本第一の温泉にて四時湯治の人多く繁昌の地なり、此所の人竹細工に妙を得て、いろいろの竹籠をつくり出す、有馬籠と名物なり、湯治の人買求めて家づとゝす、駿河の府中又竹籠の名物有、其細工よし、有馬細工にまけずおとらず、関東の人は有馬籠は名もしらず、一駿河籠を賞翫するなり。（日本山海名物図会）」[16)]

とあり、文章は他文献とは重複するが知りうる資料を網羅している。現実には現地には竹が茂っており、それを細工して生活の周辺に広く利用してもらうため、各種の籠だけではなく需要に応じて各種の竹細工を生産し販売することであった。それが遠くからの湯治客に土産品として有馬竹細工を購入し広く世間に広めてもらい、有馬竹細工の著名度と販売成果をあげることであった。ただそこには有馬温泉に湯治客が集まってくるので、現地の竹細工を広く媒体とすることに効果があった。ちなみに伊勢神宮の参詣には、大津絵、有松絞などが、国内交通規制を維持していた当時にあって、情報を伝える土産品として知られていたが、同様な効果があったものと推定される。

4．明治初期の有馬竹細工

ここに挙げた［表］2．『ウイーン万国博覧会出品目録』は全国の物産を収録している。

14）『有馬地志』土産門　寛文4（1663）年5月

15）有馬郡誌編纂委員会『有馬郡誌』上　中央印刷株式会社出版部　昭和4年

16）小沢清躬『有馬温泉史話』五典書院　昭和13年10月

そのうち全国から収集された１点は、将来建設される博物館の展示品として、また１点はウイーン万国博覧会への出品に対する１点であった。ただ残念なことには国立公文書館にはこのときの列品目録との記載はあるが、その保管箇所には現物はなく紛失をみたのであろうか[17]。

澳国博覧会事務局（のちに東京国立博物館となる）が置かれていたため、『出品目録（抄）』が残され全品目ではないが出品物の一部が明らかとなる。ただその目的の美術工芸品だけではなく全国からの出品物の目録が、竹細工の調査にどうしても必要になってくる[18]。

そのうち全国の物産を編集した『府県物産志』は、執筆を始めるにあたって上層部から指示されたのは「諸県ヨリ逐次事務局エ転運ノ品山ノ如シ」という集積状況で、ウイーン万国博覧会へ送るためには「是衆人ノ観ル所既ニ出品目録九巻中ニ漏ルヽコト無ク之ヲ載タリ」と述べるように『出品目録』が作成されており船送することには完了状態であった。

ただ全国的収集は明治政府の強力な中央統制力によるものに依存していたが、外国への出品、内国では展覧会出品という地場産業としての発展への機会が得られ、という期待感、海外発展に対する貿易の機会、として各府県は非常に協力的とみてよい。

収集された物品が方言誤称などにより、これらの物品を「標準」とすることができないので、ここに出品目録に基いて改めて「鉱植動製四部（鉱物・植物・動物・製造）ノ四部」に分けて、「諸県ニ告ケ国産ト称スヘキ物ノ一ケ年産出代価等取調一々其下ニ詳記シテ他日点検ノ便ヲ得セシム」として記載する項目の方法を付加することを述べている。したがって『府県物産志』の内容には以上のことを考慮にいれてみることが必要であるが、また山本一家の政府への協力体制にも目が注がれるべきであるが、何分とも京都に居住地としているために、往復することに難点があった[19]。

ここではこの資料が全国物産のすべてを網羅していたかを検討すべきである。ただ竹細工については府県の行政上の統制外の居住民（あえて名称を省略）が存在したことであり、これらの生産品を除外していてはいなかったかということである。彼等が村八分に置かれていたならば、これらの人たちの生産品の生産内容（生産品目・数量）を統計に含有していなかったか、あるいは無視されたのであろう。

17）『公文録』各局伺録　博覧会事務局　明治６年６月
　一　博覧会列品目録
　この書類は別置ではないかとも思われるが、現在まで、みることはない。

18）横溝広子「ウイーン万国博覧会出品目録草稿（美術工芸編）（１）～（３）」『美術研究』第357～359号　東京国立文化財研究所美術部　平成５年７、12月、平成６年３月［東京国立文化財研究所編『明治期万国博覧会美術品出品目録』中央公論美術出版　平成９年５月に収む］

19）角山幸洋編『府県物産志（明治７年６月）』影印と研究（関西大学経済・政治研究所研究双書第100冊）　平成９年３月　前文

ただ大正期には、これらの生産を無視できなったではないか。『竹製品ニ関スル調査』は、明治から大正期にかけての生産を詳記したものであるが、ここでは取り扱ってはいない[20]。

この『府県物産志』の内容を検討するに際して問題になったことは、府県毎に違っている統計上の各産物の生産単位をどのように統一し、集計するかであった。

これらは明治6（1873）年から始まる『府県統計表』の編集段階で解決しようとすることになる。このときの数値が挙がっているが、

兵庫県摂津国八都郡免原郡武庫郡川辺郡有馬郡

○藤竹葭器類

竹細工	30櫃
籠細工	3,430櫃
笊	6,200荷
箕	120駄

とある。この単位はすべての竹器を1括にしてあるので、内容の多様性を明らかにはできないが、数量からウイーン万国博（1ヵ年製出650櫃）と比較するならば非常に増加していることが明らかとなる。この数値が、それぞれの完全な全国的統計表が完成するのは明治8（1875）年府県物産表であろう。ようやく府県別に「品名・法量・価格・1カ年の生産量」が示され、どのような物産が提出されたかが判明し統一がとられるようになる。

竹細工として何を竹細工・竹籠と称したかは記述の内容をよく検討しなければわからないし、生産地は販売目的のために品名を変え新製品として販売する。それに資料は断片的であったので時系列には揃ってはいない。そのため時系列に従って並べたが、江戸時代には竹籠であり、檜の柄杓から竹の柄杓への展開であった。このような身近な竹細工から輸出向へ商品へ展開することになるのは、竹をあらゆる場面に応用すること、竹を他の素材と組み合わせる、竹を生活の場面に張り合わせること、などをみることができる。

実例を品目と輸出先をあげるならば、

この時期の竹製品は、竹器・竹籠・簾に分類されるが、

竹器類　炉塀（衝立）、掛棚、茶棚、椅子、卓子、

竹籠類　買物籠、着物籠、屑籠、豆籠（ジンコ）、

20）農商務省農務局編『副業参考資料―竹製品ニ関スル調査』農商務省農務局　大正11年2月

21）勧業寮編『明治六年府県統計表』（II）［『明治前期産業発達史資料』別冊（7）明治文献　昭和40年3月に収む］

勧業寮編『明治七年府県統計表』［『明治前期産業発達史資料』第1集　明治文献　昭和34年1月に収む］

22）［澳国博覧会賞状及賞牌頒与表］元澳国博覧会事務局編　明治8年

竹簾　　簾、日掩用皮付（皮付・皮ナシ）、装飾用（大割、小割＝細割）、

に分けることができるが、一部には農家の日用品（籠類）を生産することもあるが、それよりも輸出向の竹細工に努力を傾けつつある傾向がみられ、生産形態も家内工業から工場生産へと向かいつつあった。